

で、働きづめであった。小さいころは体が弱かったのに……。今、老母を看護してくれている。

長男の弟は父の死後上京。自力で大学を出て書道家となった。書道関係の出版社に勤務。

末の弟は、北朝鮮の社宅で生まれ四歳のときに引き揚げてきたがすでに五十七歳。

ありがとう！ お父さん。

母と私の数え歌

香川県 大林 充

我が母、大林き乃。明治三十六年十一月七日、茨城県猿島郡古河町にて、旧水戸藩十宮下長四郎、母タツの次女として出生。だが幼時、母とは生別、続いて父を事故で失ったため、祖父宮下曾之助のもとより、時には横浜、ある時は九州の長崎、更には朝鮮京畿道開城の親族の所を転々とさせられ、悲しく辛い生活を余儀なくされたようである。従って、その辛酸を舐め尽

くした過去を、母は私たちにあまり語ろうとはしなかった。それよりもむしろ、横浜の叔父叔母のハイカラな暮らしぶりや、長崎県五島で聞き覚えた面白い方言などを、さも懐かしそうに繰り返し話して聞かせるのだった。

朝鮮の叔父の所での、狩猟を趣味とした叔父が飼っていた二頭のポインターの話、鹿に似た「ノロ」という獣を、母自らさばいたこと、あるいは狐や兎のさばき方など、小さな子供だった頃の私にとっても、ワクワクさせられる興味深いエピソードとして、今も鮮明に記憶に残っている。

昭和四年、二十六歳になった母は、縁あって、我が父、大林勝巳と婚姻。京城府林町に最初の居を構えた。翌五年八月には長女保子誕生、同七年十二月長男充、同十年次男勝、同十二年次女郁子（死じ）、同十五年三女孝子と五人の子をもうけた。

父は結婚前、叔父から譲り受けた京城府明治町の手芸材料店を、隣家からの類焼で失い、経済的にも苦境のどん底で母と家庭を持った。そのため事業が安定す

るまでに二度転居しているのを見ても、その間の母の苦勞は想像に難くない。

けれども母にとつて、それまでの、言わば流浪の旅の如き前半生に比べれば、いかに貧しくとも家があり、伴侶があつて、日々の苦勞を分かち合える生活は、至福のものであつたに違いない。

私の記憶によれば、次女出産の後、しばらく経つて、母は大病にかかり、長期入院を余儀なくされた。

いつもそばにいてくれる母が家にいないことは、寂しがりやの私にとつて、とても辛く、毎日毎日母の病室に入り浸つていたのを覚えてゐる。

ところがその入院を機に、母は病抜けしたのか、すっかり健康になり、以後戦中戦後を通して、病弱の父とは比べものならぬほどたくましくなつた。

昭和十七年秋、父の事業は戦時の企業整備統合令により個人商店から商業組合に改編され、一方京都の藤井絹糸工業所との合併による朝鮮絹糸工業株式会社の設立に伴い、父は専務取締役として新会社の経営に当たることになつた。そして通勤の便をも考慮して、漢

江の南岸に開かれた小高い丘陵地の頂上の一画に住居を新築し、市内明治町の事務所と、金浦空港近くの永登浦工場の両方に通い始めた。

ところで父の建てた新築の住居は、それまでの市内の借家と違つて広々とした敷地に、当時としてはモダンな間取りの建築で、冬の厳しい寒さを凌ぐために円柱式のベチカを建物の中央に据えて、各部屋が常に暖まるよう設計され、また父のアイデアで、そのベチカの熱を利用して台所や湯殿に温水が出る、セントラルヒーティング方式になつてゐた。その他、景観を楽しむために、西北の部分にガラス窓を主体のサンルームを作り、遠来の客をもてなすのに利用した。庭には菜園や鶏舎もあつて自給自足できたし、大好きな父は、私たち子供の遊び相手として次々と子犬を飼つてくれた。

母はといえば、使用人の韓国人男性を伴つて、ひねもす畑の手入れや草花の栽培に余念がない毎日であつた。周囲を赤松林に囲まれた丘陵の頂上部分にその家はあつたので、冬の雪景色は誠に見事で、まさに千金

に値した。

ところが、第二次大戦は日増しに戦況悪化し、昭和十八年頃から食料品をはじめ諸物資が不足し始め、米の配給や衣料切符などが始まり、母はそれらのやりくりで随分頭を痛めたことと思われる。

もうひとつの母の悩みは、水道の水圧が下げられたために、高台にあったわが家の水道が、一日のうちでほんの数時間しか水が出なくなったことである。毎日の炊事用の水はもちろん、一日置きに入浴のための風呂の水まで、母はバケツを二つ下げて、三十数段の石段の下から運び上げた。畑に打つ水も近所の井戸からもらい水をして同様に運んだものである。それは今思えば出しても空恐ろしくなるような大変な仕事であったと思うのだが、母は一言も不平を言うことなく、黙々として額の汗を拭いもせず、長い長い階段を上り続けるのだった。それは昭和二十年八月十五日、終戦を迎えても終わることなく、九月末に事務所であった市内朝日町へ引っ越すまで続いた。

父は二十年三月に陸軍に召集され、兵役に服した

が、四十二歳からの軍務であり、それはそれで大変だったに違いないが、残された母は、女学校二年の長女をはじめ、中一の長男、國小四年の次男と四歳の末娘を抱えて、食べ盛りの子供達のために、七、八十坪の菜園を耕し、さつまいも、馬鈴薯、茄子、胡瓜、南瓜と必死になって植えていった。また時には、手持ちの衣料を朝鮮人部落で白米に換えたりした。そうして手に入れたもち米で、母は時には私たちに、お皿いっぱい

の大きさに広げた大きなおはぎを作ってくれた。今、巷にはあらゆる食品が溢れ、欲しいものは何でも容易に口にすることができのだが、あの頃、母が食べさせてくれたものに勝る味を私は知らない。また、蒸かしたての新じゃがいもに塩を振っただけのおやつも懐かしい。食べ物の思い出は数多いが、幼い頃、母が冷御飯を利用して作ってくれた鮭チャーハンや、茹でた馬鈴薯を摺鉢に入れて砂糖を加え、つぶした甘いマッシュポテトなど、いまだにふっと思い出すメニューである。

昭和二十年八月十五日、京城中学のグラウンドで全

校生徒が整列する中を、雑音でほとんど意味を解し得ない『終戦の詔勅』がラジオ放送され、校長先生より戦争が終わったことを聞かされた。そしてその日の下校時にはもう、いつの間になられていたのか、私たちがとっては初めて見る韓国の国旗を押し立てた人々が町並みを闊歩し始め、そこかしこで一般邦人や日本人との間で小競り合いが始まっていた。

漢江南岸の別荘地的な丘陵の上にあったわが家は、周りを韓国人の集落に囲まれたような地区であったから、自警団と称する彼らの組織が、いち早く姿を隠してしまった日本の警官に代わって、地域の司法を代行し始め、それまでの日本人対韓国人の力関係が一挙に逆転した。そのために孤立無援の状態となり、誠に心細い毎日であった。

それから数日経ったある朝、耳をつんざくような爆音と共に、数百機の米艦載機編隊が京城の空を覆い尽くすように飛来した。超低空で旋回するグラマンや鷗カモメのような翼のヴォートシコルスキー、双胴のロッキードP38等々、それまで戦時少年雑誌のグラビアで見る

だけだった様々な機種が、現実に私の目の前の空に飛来しては飛び去って行く様子を、怖さよりも、圧倒的なボリュームの前に、ただただ「凄いな！ きれいだなあ！」と感嘆の声を洩らしながら、いつまでも飽きず見上げていた。

米国の戦力を空から見せつけ、仁川沖に集結した上陸部隊は、やがて重装備の戦車群を先頭に押し立て、見たこともない大型の砲車や、工兵隊が使用すると思われる各種の機材を積んだトレーラーを、続々と揚陸し、一路京城市内へと長蛇の行進を開始した。

丘の上のわが家の窓から、眼下の国道に果てしなく続く車両の流れを見下ろしながら、私はその時はまだ、日本へ引き揚げるなどと思ってもみなかった。

京城で生まれ、京城で育った中学一年生の私には、乏しい情報しか入ってこないその時点で、明日からの生活を見通し、内地への引揚げを考慮する力は未だ蓄えられていなかった。そして、四人の子供が、当時四十二歳の母を中心に、ひたすら父の帰りを待ちわびる毎日が続く。父が入隊する前に、私に預けていった日

本刀の一振りをも、万一の時にはこれで家族を守るんだと、ひそかに夜具の中に隠して寝た日々であった。

九月初めのある日、真つ黒に日焼けし、別人のように肉付きの良くなった父が、部隊解散の際に支給された衣料や煙草などを毛布で包み、背中に背負ってひょっこりと玄関先に現れた時は、あまりの嬉しさに声も出なかった。やがて私たちは復員した父と共に、旅支度を整え、十月二十日頃京城を発ち、五日間かけて父の郷里、坂出に向かった。

竜山駅から有蓋貨車に乗り込み、途中幾度も停車しては、汽車を動かす朝鮮人の鉄道員に金や物をせびられ、やっとたどり着いた釜山港では、米兵による所持金の検査におびえ、その後は夕闇迫る街に出て底をつき始めた食糧を探し求めた。

翌日、やつと乗船した『興安丸』は、船室は既に満員で、我々一家は最上甲板の大きな煙突の陰にやつの思いで僅かなスペースを確保した。船内は超満員でトイレに行きたくてもなかなかたどり着けない。やつとの思いで人波をかき分けトイレに入ろうとしたら、

内部は排泄物が溢れてしまい、とても中に入れる状態ではなくなっていた。そこで父は、持参していたアルミのバケツに小用をさせ、そのバケツに長い紐を結びつけて甲板から海面に降ろすことにした。けれども私や弟、それに未だ幼年の妹はそれで何とかなかったが、母や姉はどのようにその難関を乗り越えたのか今は記憶にない。

翌日の夕方、船は山口県仙崎沖に到着。待ち構えた舳はしげに乗り移るのだが、舷側の階段だけでは下船に時間がかかるので、船腹に張った縄ばしごを伝って下りるように指示された時は、思わず身を縮めてしまった。私の高所恐怖症はあの瞬間から始まったのに違いないい。

死ぬほどの恐怖を味わって上陸した仙崎の港町から国鉄の駅まで、牛が引く荷車に乗せられて運ばれたが、その道中で配って頂いた、大きな麦飯のおにぎりと一切れのたくあんの味がいかに美味だったか、私は今でも忘れないし、また忘れてはならないと思っている。

日本という、祖国でありながら、私にとってには未知の国にたどり着き、初めて口にした食べ物、麦の割合が多くて、ともすれば崩れそうになるおむすびであった。であるから、その後十数年経って、ソウルに旅した時、同行の友人たちは、ソウルのレストランで出される麦御飯に音を上げる者が多かったが、私はむしろ嬉々として久しぶりの麦シャリを楽しんだものである。

かくしてわが家族は、途中さまざま困難に遭遇しながらも、揃って元気に父の故郷である瀬戸の港町、坂出に帰り着くことができた。そして母にとっては二十年ぶりの故国日本ではあるが、生まれ故郷の茨城とは似ても似つかぬ四国の小都市、坂出で始まった第三の人生は、物不足に加えて、頼るべき肉親のいない心細いスタートであったことだろう。父も、しばらくは幼少時代に暮らした町並みの此所彼所に懐かしい思い出を見いだしていたが、程なく戦後の大混乱時代に呑み込まれ、六人の家族をいかにして食わせていくか、雨露をしのぐ住まいの確保をどうするかと、帰国前に

は想像もしなかった障害の連続に否応なしにぶつかっていくのだった。

そんな中で、父は小学校時代の恩師の世話で、高松市藤塚町に三十七・五坪の土地を貸してもらい、たった十二坪の木造バラックを建築し、昭和二十一年三月、一家は希望に燃えて移り住んだ。

しかしながら、それから昭和二十四年までの三年間は、物価統制令のもと、本業の米商を始められないまま、飲食業、金物屋、荷車の販売等々、随分いろいろな職業に挑戦し、すべて素人の悲しさで成功に至らず、父はついに結核で病床につくことになった。

当時中学生二人、小学生二人の子供たちを抱え、働き手である父が病に倒れた家庭を母がどのようにして維持していたのか、私には記憶が残っていない。当時も、またその後の長い月日の中でも、この時代の辛さを母から語って聞かされた記憶のないのが不思議に思われるのだ。

さて、父の病状も天の助けか「パス」という結核の特効薬がその時期に輸入され、それを服用することに

より、瞬く間に完治した。

その後の紆余曲折は、時の許す限りゆっくり語りた
いのであるが、閑話休題、そのような厳しい環境の中
で、必死に闘っている父に対し、母はどんな時でも弱
音を吐かず、一見無頓着な表情で、飄々^{ひょうひょう}と事実を受
け止めているように見えた。

けれどもその後、暮らしがいくらか楽になったある
日、私たち子供を学校に送り出した後、父母が、昼食
抜ききの生活が続いていたことをふと姉に漏らしたと聞
いた時、私はその苦勞に気付かず、自墮落な考えで、
学習も真面目にせず、高校、大学と進学し、今日まで
わがままの限りを尽くしてきた己の放らつきをつくづ
く思い知るのであった。

そんな私にも、母は私が東京より帰省する度に、父
や他の兄弟たちに気付かれぬように、こっそりと小遣
いを握らせてくれた。当時、父に送ってもらえる仕送
りが月額一万円だったが、母は五千円程の金額をいつ
も用意して渡してくれた。「外食券食堂の食事では、
おなかが空くだらうから、なにかに栄養のあるものを買

って食べなさい」というのが母の口癖だった。そんな
母の思いを知りながら、大事なそのお金で私は、友人
たちと新宿のトリスバーに出入りしたり、ちょっとオ
シャレな替えズボンを買ったりして得意がっていた。
まさに不肖の息子である。

さて、私が東京に進学し、下宿するようになったの
で、母は群馬県太田市に在住する実の姉、野沢とよ、
東京都三鷹市に住む腹違いの妹、菅谷まさ等、親族を
訪ねて二度ほど上京してきた。当時、まだまだわが家
の経済環境はゆとりのないものだったが、母はどうや
って工面するのか、旅費も、服装などもきちんと整
え、にこやかに東京駅に降り立ち、迎えてくれた姉妹
と手を取り合った。母は若い時から乗り物に酔う体質
であったが、姉妹に会える喜びからか、東京への旅で
はあまり酔うこともなかったようだ。

そして私が大学を卒業する時、しばらく来れなくな
るからといって、母は二度目の上京を果たした。その
時は私も共に群馬県太田市や、母の生まれた茨城県古
河市も訪ね、母の生母にも会った記憶がかすかに残っ

ている。そしてその夜は鬼怒川温泉に一泊し、母と二人きりで溪谷の川の水音を聞きながら食事をした場面が、今もはっきりと記憶にあり、あれがせめてもの親孝行だったかなと折にふれて思い出すのである。

学業を終え、京都市の会社に四年間勤務した後、私には両親に懇請されて家業の株式会社大林糸店を継ぐことになった。

昭和三十五年四月に帰郷して以来、義兄と二人で東瀆手袋業界を中心に事業を拡大し、繁忙を極めた。

そして昭和三十六年四月結婚し、父母、姉夫婦と二人の子供の三所帯が同居できる建物を新築して移り住んだ直後、姉婿が交通事故で急死し、父母は孫二人と未亡人になった姉と共に、市内室町に新築した家に移るようになった。

ともすれば暗くなりがちの家庭を明るく維持するたために、父も母もずいぶんと気をもんだことであつたらう。孫たちの成長を促すために、それまでの畳の上の生活から、テーブルと椅子の生活に変えて、孫たちの足が少しでも長くなるように願つたと聞いた。そのせ

いか、この孫たち二人は、ともに人並み以上に背も高く立派な大人に成長して祖父母の期待に込えている。

父は平成五年四月二十六日、高松市栗林町の平和病院で最期を迎えたのであるが、その少し前に、なぜか母も右脚の股関節骨折で同病院に入院する。それはあたかも死を迎えんとする父が、少しの間、母を間近に呼び寄せたような、そんな気がしてならない。

母は、平成十年二月二十三日、永かつた九十五年の歴史の終わりに、我が子四人と二人の嫁、一人の孫に囲まれて、息を引き取つた。

母は、私が小学生のころから、よくいろんな歌を教えてくれた。そんな母がお手玉をする時に、よく口にした数え歌があつた。その歌を歌いながら、母は幼き日の暮れなずむ鎮守様の境内へと帰っていき、私は子供の頃の、母の背のぬくもりを思い出す。

『一番初めは一の宮、二は日光中禅寺。三は佐倉宗五郎、四は信濃の善光寺。五つ出雲のおおやしろ、六つ村の鎮守様。七つ成田のお不動さん、八つ八幡のお稲荷さん。九つ高野の弘法師……』

あれから母は、父の待つ冥土への旅路の中で忘れていた十番目を思い出してくれただろうか？